九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

寛政期の豊後日田漢詩壇 ： 咸宜園前史

高橋, 昌彦
純真女子短期大学助教授

https://doi.org/10.15017/4741959

出版情報：雅俗. 8, pp.173-184, 2001-01-27. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

寛政期の豊後日田漢詩壇

――咸宜園前史――

高橋昌彦

江戸時代、豊後国日田地方は、そのほとんどを天領として過ごした。そのため他の藩領とは異なった環境のもとで、独自の文化圏を育んでいった。日田の旧家に生まれ、書画・俳諧・漢詩・国学等々、あらゆる分野に精通した森春樹は、『亀山鈔』[注1]（文政十三年序）の中で、それぞれの分野について、簡にして要を得た整理をしている。その中から、日田が経済的により発展し、様々な人物を輩出し始めた、近世中期以降の儒学・漢詩文について述べた箇所を引いてみる。

（前略）隈町の学は、相良泰庵。医は筑前の官医鶴原玄益に学て、香月貞庵と同門にて、儒書は貝原存斎・貝原益軒兄弟の間に学ひ、京都の伊藤東涯・笠原雲渓に親炙せり。されは貝原翁はしめ長崎の官梅道栄・肥後の北村雪山等、相良の家に来りて遊へり。牛山香月豊前中津侯に聘せられて、牛山か言によりて秩二百石をもて召されしかとも、泰庵不起。泰庵の子養拙・玄範・松軒皆学才有。養拙医は牛山に学ひ、儒は笠原に学へり。養拙の長子梅庵医は同牛山に学ひ及松岡玄達に学ふ。儒は誰によりしかしられす。岡白駒と交れり。兼て狩野派の画をよくす。梅庵の弟仲英、白駒・玄達・屈原山・龍草廬及長州の山県周南・小倉の土屋昌映・長崎の高暘谷・肥前の大潮禅師・筑前の亀井南溟等、詩牘贈酬ありて極て相推重す。

廣円寺の道寧師は元肥後熊本延寿寺の二男也。学才有て蘭陵詩集有。書は長崎の水月庵巴陵に学て草書よし。其二男寺を継て法蘭師也。十七の年江戸に往て南郭門人となり、又大潮禅師に学て最詩名有。予か壮歳の時、江戸医家某むかし

京師にて問学の因有とて書を贈て曰、今肥後の藪孤山・筑前の亀井道済と上人の名、鼎足の如く轟といへり。安永天明の頃、頻に高名にて書生も甚多かりし也。今の府内光西寺の華光院嗣講師は上人の二子、豊前正行寺の雲華院嗣師は上人の娚道寧師の孫也。

豆田の長福寺の通玄師はもと廣円寺産にて豊前小倉の道香門人也。其養子宝月擬講師は筑後福島の産にて大潮禅師の門人、詩名有九州三絶と云。姫島の七絶世のしる所也。宗旨の学に名有て、近頃の東本願寺の講師加賀の専明師の若き時来り学れ、豊前正行寺の皆往院講師も来りて学られしといへり。又八代の高徳寺易行院講師は此宝月師の二子也。

今の広瀬廉卿先生は南溟堂門人にて其業尤盛にして、西国は勿論上方東国よりも来り学もの多き事古今に絶す。

広瀬淡窓の咸宜園隆盛で、この条を結んだ後、『亀山鈔』は、画・和歌・狂歌・俳諧・蹴鞠・立花挿花・香・煎茶・点茶・碁と他の条へ続いていく。さて、このように、日田の儒学は、医を専らとした相良一族や広円寺・長福寺の僧侶たちの手によって受け継がれ、成長したことが見て取れるのである。相良家とその周辺の文事は、相良仲英録の総集『豊城濫水』（寛延四年刊）によって、また、釈道寧はその詩集『逍遥草』（延享五年刊）、法蘭は『銭塘詩集』（寛政四年刊）によって、刊本からも今日その事跡を知ることができる。[注2] そして、これら『亀山鈔』の記事や今日残る各人物の著述に沿って、網羅的に書かれたのが、中島市三郎『咸宜園教育発達史』[注3]といえる。同書が日田文化の通史として優れた著述であることは、今更言うまでもないことである。しかし、細かい点では、誤謬や遺漏が見えるのもまた事実である。本論は、広瀬淡窓の漢詩の師匠である松下筑陰が日田に滞在していた寛政期に焦点をおいて、改めて日田の文事について見ていこうとするものである。

一

松下筑陰は、寛政二年、久留米藩を出奔し、日田の僧侶たちを頼って、この地へやってきた。[注4] 彼を迎えた六十三歳の法蘭は、後に「贈松世民之佐伯序」（『銭塘文集余稿』所収）中で、

（前略）世民は本筑人也。性文辞を嫺ひ、最も詩に長じて、李済南に刻意す。……人となり假儻（拘束されない様）、世柄と方円を鑿すること相内れず、因って其の国を出、越て草莽に在るが其の始末也。予、方外の旧なるを以て、予が館により、遂に銭唐の側に寓すること嘔嘔（嬉しそうな様）たり。章句師となり、室は懸磬（何もない）、日夜其の佔畢（経義を解せず文字のみを読む）を呻み、群児を従え、糈を取りて自給す。居ること恒に怏々（憂う）として、志を得ざる也。（原漢文）

と言っている。久留米において自分の思うようにいかず、日田の地で塾を開いた。藩領を飛び出した儒者が、曲がりなりにも生活していける。日田には、筑陰を受け入れるだけの文化的・経済的環境があったと言えるだろう。特に法蘭は、『亀山鈔』にもあったように、詩名を轟かせ、南冥も兄事したほどの詩人であった。今日、広円寺に残る『銭塘文集』は、草稿を含めて全部で二十一冊。うち、寛政期以降の詩文を収めるのが『銭塘文集余稿』一冊である。寛政四年に出版された『銭塘詩集』二巻二冊は、『銭塘文集初篇』十巻六冊の一部であり、写本には釈大潮の朱評が残っている。これらの詩文集を見ると、法蘭を慕っていかに多くの人々が彼の元を訪れたか、どれほど大きな存在であったかがわかるのである。その一例を挙げてみよう。

寛政五年、法蘭と筑陰の元を、一人の人物が訪ねてきた。その人とは、牧園茅山であった。明和四年、筑前志摩郡師吉村に生れ、南冥門に入った茅山は、門人中で頭角を現し、学成って後、九州各地に遊んだ。寛政七年に柳川細工町常光寺に寓して教授し、その後柳河藩に召し抱えられる。この年は、まさしくその遊学の時期にあたる。著書『行在或問』（文政十一年刊）は広く読まれたが、他には、『南冥亀井先生遺稿』[注5]一冊（天保二年序・木活）を校訂刊行している。

さて、この時の茅山と日田の人々との唱和を収めた詩集が『日南探珠集』[注6]（写・大本一冊）として残っている。内題下小書には「是寛政五癸丑十月稿也、余自太宰府遊日田、與法蘭松世民等周旋所作也」と記され、成立時期がわかる。この茅山の来訪を、淡窓は『懐旧楼筆記』[注7]巻三で、寛政四年の事として載せている。同書における幼少年期の記事については、年次が異なるとわかるものや曖昧なものが他にも存在し、引用に際して十分な注意をしなければならない。この場合、内容に極

めて興味深いことを語っているので、引いてみることにする。

此年。筑前ノ人。牧園文哉。当県ニ来リ。文之進ノ家ヲ主トス。予相見タリ。是ハ亀南溟ノ門人ニテ。俊秀四五人ノ列ナリ。名猪。字大野。茅山ト号ス。法蘭松下ノ諸子ト周旋ス。予ニモ序一篇ヲ贈レリ。時ニ年二十六ト覚ユ。此人筑ニ帰リテ。予カ名ヲ悠揚ス。南溟父子モ。往年入門ノ約ハ。聞キ入レラレタレトモ。実ハ牧園カ言ニテ。始メテ予アルコトヲ知ラレタリ。後年予筑ニ在リ。南溟先生ニ陪セシニ。先生予ニ戯レテ。牧園吾子ヲ称シテ。海内無双ノ才子トイヘリ。此言実ニ当レリ。然レトモ。今ヲ以テ見ルニ。外ニ一両人ハアルマシキニモ非スト言ハレタリ。予大ニ踧踖シタリ。文哉後ニ改メテ進士ト称ス。柳川ノ儒官トナレリ。

後半部に語られる、この時の出会いで淡窓の才子ぶりを見て、南冥に積極的に喧伝したのが、この茅山であったという記述。寛政五年、淡窓は十二歳であった。因みに、茅山は文中にある通り、寛政四年ならば二十六歳（寛政五年は二十七歳）と言うことになる。淡窓の情報は、亀井塾入門以前に、このような形で南冥へと伝わっていたのであった。

二

では、あらためて『日南探珠集』について見てみる。本文七丁、仮綴じの冊子中に、作者として登場するのは、茅山の他、館林子騏（千里）・仲寅之助・森下桂（圭）・釈法蘭・松世民・藤信（婦人）の六人である。六人中、今のところ、森下については不詳。巻頭は、日田滞在中、最も世話になった文之進に贈った詩とその唱和から始まる。

贈館林千里　　牧園豬

売薬栖朝市、知名大隠儔、千山当檻秀、一水抱軒流、揮翰雲霞色、志機鷗鷺遊、女児須認得、韓老本悠々

和　　館林子騏

書剣双々至、大邦君子儔、揮毫示肝肺、傾盖晤風流、北学他年業、南溟今日遊、新知如旧識、投轄共悠々

文之進は、茅山の詩中にも「売薬」とあるように、医をもって暮らしていた。その名は、『懐旧楼筆記』中にも、頻繁に登場する。例えば、巻八（寛政十一年）において、次のようにその人物像を語っている。

館林文之進。本姓相良。中年ノ後。故アリテ姓ヲ改メタリ。没スル年四十二ナリ。此人若カリシ時。南溟先生ノ弟子タリ。俊才ノ称アリ。医術ヲ事トスルニ及ンテモ。詩文ナトハ全クハ廃セサリシ。予戚屬タルヲ以テ。幼キヨリ。常ニ往来セリ。予ニ長スルコト二十四歳。然レ共。予ヲ見ルコト朋輩ノ如シ。余カ十四五歳ノ時ニ当ツテ。或ハ市中ニテ行逢フコトアリ。予ヲ呼止メテ。吾先日某々ノ句ヲ得タリ。願ハクハ吾子カ品目ヲ受ケント云ツテ。人馬往来絡繹タル中ニ於テ。其詩ヲ朗誦シ。而後別レタリ。此人性質厳刻ニシテ。家政ノ事ニ密ナリ。然レ共亦タ一種ノ風趣アリ。

他に良益と称し、子玉という字をも持つ。相良から館林姓に改めたのは、卜者に不利と言われたためだという。詩文を善くし、『鼇山集』という著述があったが、文化十二年十月の大火で烏有に帰したとされる。前掲『豊城濫水』の編者相良仲英の次男が文之進になる。淡窓にとっては従姉にあたる伯父月化の長女伊佐が、この文之進へ嫁いだこともあって、幼い頃から親戚の付き合いが始まった。淡窓の入門簿の第一号に登場する「館林伊織」はその次男で、後に麻生姓を名乗り、淡窓の妹那智が嫁いでいる。また弟久兵衛（号南陔）の室は、伊織の妹亮である。このように、文之進の世代以降、広瀬一族との関係は、極めて濃くなっていく。[注8]

この唱和の後に続いて、茅山が若き淡窓に初めて逢った時に贈った詩が載る。

接仲童子于秋風菴、岐嶷秀英所未曾見也、且菴控山野景致緜連、因賦一絶謝贈

牧園豬

一宇幽荘似輞川、名山秀水翠欄前、風姿驚見王摩詰、能画能文尚少年

「仲」の姓は、揖斐郡代が伯父月化に贈ったもので、幼い時伯父の家で過ごした淡窓も使用していた。秋風菴を輞川に、淡窓を王維に重ねて、その優れた才知を賞賛している。この出会いが、先に見たように南冥へと伝わったわけである。

さて、この詩集の中、最も多くの人物が集い、詩の唱和がなされたのが、法蘭主催の広円寺で行われた席であった。まず

は、法蘭の詩から始まる。

此君亭集得沈字　釈法蘭

寂寞幽居傍竹林、諸賢接武此追尋、日南風色連珠照、斗際星文帯剣深、白髪江湖耽隠逸、青雲事業任浮沈、狂来未竟清談座、不譲当時嵇玩心

此君亭は、法蘭の居室の名。この後に、館林子騏の七律二首「同得斜字」「同得風字」、松下筑陰の七律二首「同得山字」「同〔牧大野来自遊南肥〕」、淡窓の七律二首「同得幽字」「同得天字」、森下圭の七絶一首「同得暉字」、牧園茅山の七律四首「同得城字」「同得寒字」「和銭塘師」「和松世民」と順に続く。そして、一番後は、姓名の下に小書で「婦人」の注の付いた作品で結ばれている。

此君亭集得楓字　藤信〔婦人〕

朔風蕭瑟竹林中、青眼相逢今古同、不独樽前清興状、開軒席上散紅楓

この人物について、『懐旧楼筆記』巻三（寛政五年）は、

円什上人ノ室ヲ阿信ト云フ。府内光西寺ノ女ナリ。詩ヲ能クセリ。其寺ニ会アレバ出席セリ。又匿名稿ヲ以テ。社中ヨリ甲乙ヲ法蘭上人ニ乞フコトアリ。此人往々甲科ニ居レリ。人トナリ風神洒落ニシテ。頗ル塵表ノ物ナリ。晩ニ妙信院ト号ス。円什ニ先ツテ没ス。円什其詩ヲ編ンテ。姫島集ト号セリ。

と情報を伝えている。法蘭の息子円什の室にあたるこの人物は、女流詩人で、この地ではかなり知られた存在であった。残念ながら、原采蘋や亀井少琹よりも一世代早いこの人物は、今日ほとんど無名といってもいい。[注9] 確かに、その詩集は現在、広円寺に、『姫島遺稿』（写・大本一冊）として残っている。この他に、草稿にあたる『姫島詩集』（写・大本二冊）、南冥と原古処の批正の入った『姫島詩稿』（写・大本一冊）が現存している。妻の没後、夫円什は遺稿を編み、その序文を淡窓に頼んだ。依頼を受けた淡窓の日記には「姫島集序脱稿」（『淡窓日記』[注10] 巻二下、文化十一年四月二十六日）とあり、同年五月二十一日には「書姫島集序」の記述がある。この序は、そのまま『姫島遺稿』の頭に「題姫島集首」（文化十一年仲夏）と

して置かれている。序文中、淡窓は信のことを次のように語っている。

（前略）今得藤尼公詩、誦之体裁具矣。材料贍矣。句順字協無愧。作者可謂奇已。蓋其為人神情朗徹、有林下風、耽嗜経史、手不捨巻。亦古閨秀之所無也。夫然故其発揮情性、不以彼而以此。豈不誠女丈夫哉。尼公名信、字如麟、姫島其号。我豊光西寺主女、世奉親鸞氏之道。適同派広円一環上人、晩節削髪。卒時年四十九、上人為録遺稿、凡一百六十七首云。（句読点は高橋）

日田の女流文人には、俳人として夫野紅と共に名を残す長野りんが前にいるが、漢詩文の分野においても、このような人物が存在していたことは、この土地に受け入れる土壌があったからといえるだろう。

さらに引き続いて『日南探珠集』を見ると、「画馬分韻」の詩題で、五人の作品を収めている。『銭塘文集余稿』には、同じ詩が「仲神童宅集賦画馬分韻」の詩題で出てくる。つまり、淡窓の家で行われた詩会であったことがわかる。ここで、淡窓の詩を引いてみる。

同分韻　　仲寅之助

開巻驤騰碧玉驄、何人妙手奪天工、五花雲結班身満、萬里功成汗血紅、塞上真堪破驕虜、絹端疑見起長風、千金縦是求神駿、龍種寧能在世中

今日残る淡窓の詩の中でも、最も早い時期の詩であろう。描かれている馬の力感が伝わるようで、確かに十二歳が作ったとは、思えないような出来である。その後は、法蘭の「月夜泛舟亀陰」で始まる詩会が、郡中第一の勝景と称えられた亀山のもと、舟を浮かべて行われたりもしている。そして、末には、茅山が日田を離れるにあたって贈った筑陰「薜蘿亭送牧大野還筑」の詩が載る。

高亭惜別対氷壺、暗澹亀峯落日孤、千里漸他空驥足、一時羨爾抱龍珠、人間歓楽多浮波、海内交遊已有無、莫向風塵論揩笏、新詩自是在江湖

薜蘿亭は、相良家の亭号である。この詩をうけ、そのまま、別れを惜しむ気持ちを込めた各人の「夜猿啼」で、詩集は終わっ

ている。

三

さて、『日南探珠集』は、茅山を迎えたことを契機として行われた詩会の際の唱和をまとめたものであったが、このような会は、決して臨時に行われたものではなく、この地では、当時日常的に行われていたという。『懐旧楼筆記』巻三（寛政五年）には、次のような記述が見える。

此比詩会ト云フコト。時々アリ。予モ是ニ與レリ。イツモ法蘭上人上首タリ。松下モユカレタリ。会者或ハ六七人。或ハ十余人ニモ及ヘリ。其所ハ。広円寺。長福寺。長善寺ナトナリ。浄満寺。護願寺。相良東岳カ家ニモ会セシコトアリ。我家ニモ会席ヲナセリ。

大抵は寺で催され、僧侶の間で開かれることが多かったようだが、文之進の兄である東岳の家や先程見たように淡窓の家でも行われたことが、改めてわかる。そして、その中心に存在したのが、法蘭であった。時期は不明だが、その様子を伝えるものが広円寺に現存している。『聯璧詩稿』『聯璧詩草』『聯璧詩草二編』（各大本一冊・写）がそれである。中に登場する名は、主に僧侶が中心であり、そこには法蘭の朱批と順位が付してある。どうやら、詩題を与えてその優劣を競ったことは、先の信に関する記事のところにも、甲乙をつけたと出てきたように、このような資料からも窺える。

この時代、全国各地に登場してきた詩社というものが、日田にも存在していた。そして、その盟主は法蘭であり、彼の周りに筑陰や若き日の淡窓などが集まっていた。更には、他の地より訪ねてくる茅山のような人物もいたわけである。同じ時期には、他にも高山彦九郎などが日田を訪れている。天領という地域は、このように、さまざまな階層の人々が離合集散し、交流するという特異性を持っていた。僧侶や儒医、商家の子女、行脚の者。そして、これに加えて、代官・郡代たちの存在。江戸中期から後期にかけて、その職にあった岡田・揖斐といった人々の名は、一つ一つ採り上げないが、「岡明府」「斐使君」

などの呼称で、今まで掲げた詩文集や筑陰の詩文、あるいは月化などの俳書にもしばしば登場する。藩主が存在する土地と異なり、武士と町人・僧侶が極めて近い関係でいられたことが、このような環境を培っていったのだろう。

とすれば、淡窓の才能は、亀井の塾に赴いたことで突然開花したわけではなく、日田という土地の中で、さまざまな人々との交遊を経て、着実に育まれたことが、あらためて確認できるだろう。殊に、先に見たように、その中心にいた法蘭の存在は、大きかったに違いない。そして、法蘭がその才能を認めていたのが、久留米藩を飛び出してきた筑陰であった。二人は、短い期間の中で、相当深い親交を築いていった。その法蘭と筑陰の関係を表した逸話が、森春樹『蓬生談』[注11]巻九の七に残る。

むかし、爰の広円寺に、津江山の長谷部家に久しく伝りし先祖兵衛尉信連の持たりし笛といふを、津江家亡て後、百姓の家に伝はりしを、予か壮年の時、法蘭上人の時、此寺に調て置しを、其笛二管なるを、一管は久留米の流人松下世民と云儒者、久く上人に従学せし間、この松下に贈りて、今一管寺の什物にて有し。（下略、句読点は高橋）

筑陰が日田に暮らしたのは、四年足らず。筑陰の詩文集『梅祥書屋存稿』[注12]所収の日田時代の作品には、何カ所にもわたって朱が入っている。その一つ、寛政二年九月二十九日成立の文「送滕子祥帰北豊序」の末には「法蘭拙評」の朱書があり、雌黄を乞うていた相手が、法蘭であることがわかる。また、年時不明ながら「七日」の日付をもつ、筑陰宛の法蘭書簡[注13]には、

（前略）此間ハ城内御閑居、佳作数多御出来可被致奉察候。然ハ臘ハ去年之通、岳林精舎江相会可申と、昨夜長善玄海ト約諾申置候。御隙見候ハヽ、御同伴仕度候。精舎障有之候ハヽ、玄海方にて相催可申との事に御座候間、是非御同伴可仕候。（下略）

とあり、年末に予定される日田の古刹臨済宗岳林寺での詩会に是非同伴をと誘っているのである。このような内容と、先ほどの『蓬生談』の記事をならべてみると、宝物とも呼べる笛の一本を贈るほどにまでなっていったのもなるほどと頷くことができるだろう。筑陰が、楽器に通じていたことについては、かつて述べたことがあるが、[注14]それとも相俟ってのことだったのかもしれない。日田地域の文化は、前掲の森春樹『亀山鈔』に述べられたように、長い間に渡って育ち、受け継がれてき

たわけであるが、この寛政という時期に、このような才能ある人物を抱え、大きな文化圏を作っていたといえるだろう。だが、先にも述べたように、筑陰は、寛政六年春に日田の地を去り、藩儒となって佐伯へと向かうことになる。法蘭は、その喜びを詩に詠じた（『銭塘文集余稿』）。

贈松世民承乏文学

西諸侯国政相聞、佐伯令名最出群、海濶魚塩称地利、天高奎壁仰星文、泮宮春水絃歌涌、芸閣南風典索薫、喜爾令酬題柱志、行飛華蓋映青雲

しかし、法蘭もまた、その年の秋に亡くなってしまうと、日田の漢詩壇は、一気に求心力を失ってしまう。困った淡窓が、家族と相談した結果、筑陰を追いかけて、病弱な体にも関わらず、佐伯へと赴いたのが、その証である。淡窓はその後、様々な人を通じて話を聞き、憧れていた亀井の塾に入門するわけである。だが、才能溢れ、優れた環境に育った淡窓は、その頃には、もはや十分な実力をすでに身につけていたはずなのである。

四

やがて、淡窓自身が塾を開き、日田のみならず、九州、さらには全国各地から入門者が訪れるほどの求心力を持つことになる。その門人たちの概要を見ると、やはり、この若い頃の環境がそのまま生きているのではないかと思われる。それは、咸宜園出身者の構成のうち、全体の三分の一を僧侶が占めることである。[注15] もちろん、地縁・血縁もあってのことかと思われるが、日田地域は、これまで見てきたように、淡窓以前から、漢詩文の盛んな土壌があったからだと思われる。淡窓が開塾した後も、僧侶たちによる詩会は脈々と続いており、広円寺には、法蘭の後を嗣いだ円什が中心になって行われた文政九年までの詩会の跡が『唱和集』という書名で残っている。他にも、藩校などとは異なって、町方・村方の人物が多いのが、この塾の個性と言えるだろう。数は少なくなるが、医家・役人（県吏）たちがその後に続き、対して儒者の数は大変少ないの

である。日田の文化を支えてきた階層が、これらの割合にもそのまま表れているといえるだろう。とすれば、数は極めて少ないが女性の門人が存在した背景には、案外、信の存在があったとも考えられるかもしれない。

今まで、あまりふれられる機会のなかった法蘭上人を中心に一つの時代を追いかけてみたが、このように、寛政期の日田漢詩壇を見ることで、淡窓が中心となって築いていくその後の咸宜園文化が興った因を見ることができると言えるだろう。

注

1 昭和四十一年・日田市教育委員会発行。引用文の句読点は高橋が付した。
2 『豊城濫水』と『逍遥草』は中野三敏先生蔵本、『銭塘詩集』は内閣文庫本によった。
3 昭和四十八年・中島国夫発行。
4 拙稿「松下筑陰伝攷（上）」『語文研究』八十六・八十七号（平成十一年）
5 『亀井南冥・昭陽全集』（昭和五十五年・葦書房発行）には、未所収。柳川古文書館蔵、請求番号対山館文庫五―一四〇。
6 柳川古文書館蔵、請求番号立花文書２５０２。
7 『淡窓全集』上巻（大正十四年・日田郡教育会）所収。以下の引用も同じ。
8 『亀井南冥・昭陽全集』所収の書簡等に、相良良益として出てくる。相良家代々については、田中晃氏「相良家譜一」「同二」『日田文化』36・37（平成五・六年）に詳しい。また、その後の相良一族と広瀬家との関係については、神戸輝夫氏「広瀬淡窓一族及び咸宜園と玖珠郡について」『日田・玖珠地域――自然・社会・教育――』（平成四年）に纏められている。
9 信については、拙稿「女流漢詩人を探す」『機』No.109（平成十二年・藤原書店）において、その存在の意義を述べている。
10 『淡窓全集』中巻（大正十五年・日田郡教育会）所収。

11　故田中晃氏撮影の森家蔵本の写真によった。
12　佐伯市松下フミ氏所蔵。
13　佐伯市松下フミ氏所蔵『松下筑陰先生伝』所収。
14　注4に同じ。
15　中野範編『咸宜園出身八百名略伝集』（昭和四十九年・広瀬宗家）・同『咸宜園出身二百名略伝集』（昭和五十年・広瀬宗家）による。

〔付記〕　本稿をなすにあたって、貴重な蔵書の閲覧・複写を許可された広円寺をはじめとする各所蔵機関に、心からお礼申し上げます。